

鳥取県倉吉方言におけるラ抜きおよびレ足す動詞の形態音韻的分析

桑本裕二

(松江工業高等専門学校)

【要旨】本稿は、鳥取県倉吉方言における可能表現において、当該方言に特有の、「見れる」などのラ抜き動詞、「書ける」などのレ足す動詞、また、可能形から派生する「見られん」「書かれん」などの禁止形の形態音韻的派生とその過程について、解釈可能な体系づけを行ったものである。ラ抜き動詞に関しては、五段動詞の可能動詞「書ける」(<書かれる)>の派生と並行的に ar 削除として、レ足す動詞に関しては ar 削除位置への er 挿入と説明できる。また、当該方言では、可能形から「見られん」「書かれん」などの禁止表現が別形として派生し、可能形のないサ変動詞にも禁止形「されん」「すられん」が存在することも含めて、当該方言の特異性として指摘できる。なお、「すられん」にみられる動詞五段化の徴候も、当該方言を含む山陰地方およびその周辺地域の特徴を踏襲した現象であると指摘できる*。

キーワード：鳥取県倉吉方言、ラ抜き、レ足す、可能表現、禁止表現

1. はじめに

現代標準日本語において、一段動詞およびカ変動詞の可能形で、たとえば「見られる」が「見れる」となるように、一部が欠損した形が現れることがある。これは、文字表記上は <ラ> が欠損しているため、「ラ抜きことば」または単に「ラ抜き」と呼ばれている（本稿ではこの種の動詞を「ラ抜き動詞」と言及する）。この形式は、現代標準語においては規範的でないと意識が多く（有本 2019）、一般的には、依然として誤用もしくは乱れた言い方とされている¹。

この一方で、ラ抜き動詞は、地域方言としてもともと中部地方や西日本で使われているが²、本稿の対象方言である鳥取県倉吉方言もその一つである。鳥取県倉吉方言では、

* 本稿は、倉吉ことばの会第8回講演会（2021年2月13日、鳥取県立倉吉未来中心）で行った講演に基づき、再考を行い、加筆修正したものである。講演および本稿執筆に際し、福光優一郎氏（新居浜工業高等専門学校）には多くの助言と有益なコメントをいただいた。さらに、2名の匿名の査読者の方には、貴重なコメントをいただき、細部を確認して全体をうまくまとめる機会を戴いた。記して感謝申し上げる。なお、本稿は、JSPS 科研費 JP17K02687 の助成を受けたものである。

¹ 井上(1998: 2)は、1995年秋の国語審議会中間報告で「ラ抜きことばは認めない」とした見解を紹介している。これに対し、有本(2019)は平成27(2015)年度「国語に関する世論調査」（文化庁）では「見れる」「出れる」が多数派になったことを述べており、過去20数年で、「ラ抜き」に関する意識は、徐々に肯定的になってきているようである。

² 井上(1998: 2ff.)によると、ラ抜きは、東京にはおそらく中部地方から入り、大正から昭和の

ラ抜き動詞は、肯定形では専らその形式を規範とし、「見れる」に対してもとの形「見られる」が異形態として現れたり、それら同士が意味の対立を持つことはない。しかし、否定形では「見れる」からの「見れん」が不可能を表すのに対し、「*見られる」（この形式は非許容）からの「見られん」が禁止を表すというように、異なる形式によって意味機能の違いを見せる。

また、五段動詞の可能動詞「書ける」「読める」などに対し、「書けれる」「読めれる」といった語形が現れる。これらは、文字 <レ> が付加されるため、「レ足すことば」（本稿では以下、レ足す、レ足す動詞などと言及）と呼ばれ、西日本の方言に豊富にみられる（真田 2002: 124f.）。倉吉方言にもレ足す動詞が存在する。一方、標準語においてはレ足す動詞はいまだに許容されない形であるとされる（浅川 2021）。

本稿は、鳥取県倉吉方言を対象地域とし、当該方言では許容されるラ抜き動詞とレ足す動詞を含む可能表現について形態音韻的に体系づけ、その派生の可能性について検討し、さらに意味機能について考察したものである。

以降の本稿の構成は以下のとおりである。第 2 節で現代標準語でのラ抜き動詞の形態音韻的解釈について考察する。第 3 節は、鳥取県倉吉方言におけるラ抜き動詞を含む可能表現について、五段動詞可能形（可能動詞）との関連において体系づける。第 4 節は、倉吉方言に見られる「-れん」が後続する禁止表現「見られん」「行かれん」などの派生とその体系化について述べる。第 5 節は、レ足す動詞を扱い、派生の可能性や、もとの語形との関連などについて、他方言の類似の現象から考察を深める。第 6 節は、サ変動詞に存在する禁止表現「されん」「すられん」を扱い、その派生について、「見られん」「行かれん」などとの共通性によって捉える。また「すられん」の形態分析から、当該地域を含む山陰地方およびその隣接地域に優勢的にみられる動詞の五段化の一端が顕現していることを指摘する。第 7 節で、全体をまとめる。

2. 現代標準語におけるラ抜き動詞の形態音韻的解釈

ラ抜き動詞の倉吉方言における考察を行うにあたり、まず、現代標準語での形態音韻的解釈について述べる。

ラ抜きは、一段動詞（上一段／下一段）とカ変動詞に関わる音韻脱落である。これらの動詞それぞれの活用形、たとえば「見る」（上一段動詞）、「食べる」（下一段動詞）、「来る」（カ変動詞）に対して、可能形は、助動詞「られる」を後続させて「見られる」「食べられる」「来られる」のように形成されるが、近年の若年層を中心に、「見れる」「食べれる」「来れる」のような語形が生じている(1)。

初期にかけて若者を中心に使われ始めたとされる。

- (1) a. 上一段動詞： 見る → 見られる : 見れる
 b. 下一段動詞： 食べる → 食べられる : 食べれる
 c. カ変動詞： 来る → 来られる : 来れる

これらの例において、:の右側の新しい語形は、古い語形(:の左側)に対して <ラ> が欠損しているため、一般に「ラ抜きことば」と呼ばれているが³、音韻上は ra (2a)と ar (2b)の2種類の脱落が想定されうる。

- (2) 「見られる」からの「見れる」の音韻脱落の可能な解釈
 a. mi<ra>reru > mireru
 b. mir<ar>eru > mireru

(2a)と(2b)の示す脱落のうち、いずれの解釈が妥当であるかを検討するためには、五段動詞の可能形を対照させる必要がある。現代標準日本語には、五段動詞「書く」「読む」「行く」などに対し、「書ける」「読める」「行ける」という可能を表す語形が存在する。これは、可能動詞と呼ばれる正しい語形である。一方、可能を表す助動詞「れる」を後続させる「書かれる」「読まれる」「行かれる」という可能表現もかつては存在し、「行かれる」を除いては、今日では許容されない形になってしまっている(服部 2002: 231)。(3)は、服部(2002: 231)に基づき、「書く」に対して、古い可能形「書かれる」から新しい可能形「書ける」が派生した音韻過程を推測したものである。

- (3) 「書かれる」から「書ける」の音韻派生
 kak<ar>eru > kakeru

つまり、服部(2002: 232)の解釈に従えば、「書かれる」から「書ける」の派生には、arの脱落が考えられる⁴。渋谷(1993: 119ff.)によれば、四(五)段動詞の可能動詞「行ける」タイプは室町時代に文献に散見されはじめ、江戸時代中期頃までに優勢になったと考えられる(渋谷 1993: 124、表 12-5からは、1400-1700年に成立したものと見てとれる)。一方、ラ抜き動詞(渋谷 1993:125では「B型可能動詞」)は、同表 12-5では、1900年頃に出現し、その後間もなく定着したことになる。つまり、成立年代の序列か

³ 渋谷(1992: 187)は、代表的な解釈として「ラレル」からの「ラ」の省略という考え方をあげているが、説までに昇華されたものではないとして、同論の踏襲には消極的である。

⁴ 井上(1998: 16f.)は、例えば可能動詞「読める」などは、室町時代に発生した「読む」「読めた」といった言い方をもととし、それらは「読み得る」「読み得た」が短縮したものとみなしている。したがって、井上(1998)に従うならば、服部(2002)が可能動詞の派生に対して推定している ar の脱落は、語源的には正しくないということになる。

ら、「見られる」からラ抜き動詞「見れる」が派生した変化は、5段動詞で「られる」後続の可能形「書かれる」から可能動詞「書ける」が派生した変化の類推で、服部(2002: 232)の示した ar の脱落をあてはめることができるのである。

このように考えると、五段動詞の可能動詞(「書かれる」→「書ける」と、一段動詞、カ変動詞のラ抜き形(「見られる」→「見れる」)の生成過程は、少なくとも音韻的には⁵、同じく ar の脱落によるものとして、統一的に捉えることができる(3) および(2b))。

(4) 可能動詞およびラ抜き動詞の ar 脱落による派生の解釈 (3) および (2b))

- a. 書かれる → 書ける kak<ar>eru > kakeru
b. 見られる → 見れる mir<ar>eru > mireru

3. 鳥取県倉吉方言における可能形の表現形式

渋谷(1993: 186)によると、ラ抜き動詞は奥羽北部、関東西南部から中部・北陸地方、山陰地方および四国地方で高い使用度数をもつ形式である。また、井上(1998: 8)は、ラ抜き動詞は中部地方、中国地方で発生し、徐々に周囲に広がったと推測している。これらの先行研究が実証するように、中国地方(特に山陰地方)に位置する鳥取県倉吉方言においては、可能形の表現形式としてラ抜きが優勢である。

可能表現について、その可能行為が起因する条件を区別した場合、動作主体の能力が条件として関わるもの(能力可能)と、周囲の外的条件が関わるもの(状況可能⁶)に対して、異なる表現形式をとる地域方言が存在する。たとえば能力可能として「この子はもう一人で服を着れる」と言い、状況可能として「流行遅れだが、まだなんとか着られる」と言って可能表現の形式を区別する地域が、奥羽北部から北陸にかけて分布している⁷(渋谷 1992: 182f.)。この一方で、当鳥取県倉吉方言では、能力可能、状況可能の双方に対して、単一の形式、一段動詞、カ変動詞に対してはラ抜き動詞、五段動詞に対

⁵ 渋谷(1993: 185)は、五段動詞派生の可能動詞(「書ける」タイプ)と一段動詞・カ変動詞派生の可能動詞(「見れる」タイプ、本稿でのラ抜き動詞)は、歴史的な派生のプロセスも、共時的な形態論的派生の手続きも異なるものとして、一般的にはこれらは同一の派生として認められていないと断り書きをしている。服部(2002: 232)は、あくまで、音韻的生成について類推の結果であると推定して同現象を捉えており、また、渋谷(1993: 187f.)も、ラ抜き動詞の派生の可能性について紹介した箇所、五段動詞派生の可能動詞の類推によって発生したとする説にも触れ、その説を論考に採用する旨記述している(渋谷 1992: 188)。したがって、服部(2002)の類推による ar 脱落の音韻過程は、かならずしも日本語史上の論考から逸脱したものではない。

⁶ 井上(1998: 5)による。渋谷(1993: 30)では、外的条件可能。

⁷ 渋谷(1992: 182, 183)の図5、6からは、能力可能に「着られる／着られない」状況可能に「着れる／着れない」という本文の例示とは逆の形式となっている地域が、福井県嶺北地域に存在することがわかる。

しては「書ける」「読める」というタイプの可能動詞を一貫して用いている。ただし、当該方言の可能表現として「よー〜」「よー〜ん」という別形も存在する。しかし、いずれも能力可能、状況可能の双方として用いられ⁸、また、上記ラ抜き形も併用されているが、双方に意味や用途の弁別性はないので、本稿では、「よー〜」「よー〜ん」などの可能表現は扱わない。

鳥取県倉吉方言の可能表現については、五段動詞に関しては、助動詞「れる」を伴った、尊敬、受動の意味と同じ形式（「書かれる」「読まれる」など）は可能の意味としては現代標準語でほぼ廃れていることと連動して存在せず、可能動詞「書ける」「読める」タイプとして現れる。一段動詞、カ変動詞に関しては、標準語の「られる」後続の「見られる」「食べられる」「来られる」などは存在せず、ラ抜き動詞（「見れる」「食べれる」「来れる」など）のみ現れる。以上をまとめると(5)のようになる。なお、五段動詞の可能動詞「書ける」タイプと一段動詞・カ変動詞の「見れる」タイプのラ抜き動詞は、前節(4)に示したとおり、音韻的には同じ「ar 抜き形」（標準語形から同じく ar が削除された形）として統一できる。そして、倉吉方言の可能表現は、ar 抜き形のみ許されるということにもなる。

(5) 鳥取県倉吉方言の動詞可能形

	標準語形	ar 抜き形
五段動詞	*書かれる *kakar <u>er</u> u	書ける kakeru
一段動詞・カ変動詞	*見られる *mirar <u>er</u> u	見れる mireru

4. 可能表現の否定形における非対称性と多様性

前節で述べたように、倉吉方言の動詞の可能表現は、ar 抜きのみ許容される（(5)の表中、「ar 抜き形」の列）。これは、否定においても同じであり、五段動詞では許容される「書ける」に対し、否定形「書けん」、一段動詞・カ変動詞では、同じく許容される「見れる」に対し、「見れん」を生じる。

⁸ 能力可能として、「そんな高い車、よー買うなあ。」「あの子はまだ一人でよー着ん。」、状況可能として。「そんな派手な服、よー着るわい。」「時間がないので、その会合によー行かん。」などの例がある。渋谷(2019)は、この形式は、京都、大阪等の京阪神地方、高知など四国地方に分布していることを示している。

(6) 動詞可能形の否定形

五段動詞： 書ける > 書けん

一段動詞・カ変動詞： 見れる > 見れん

この一方で、許容されない五段動詞の可能形「*書かれる」および一段動詞・カ変動詞の標準語形の可能形「*見られる」から、否定形として、それぞれ「書かれん」、「見られん」という語形が派生する。しかしながら、これらの語形は、「行くことができない」「見ることができない」という不可能を表すものではなく、「行ってはならない」「見てはならない」という禁止の意味となる。渋谷(1992: 42)は、大分方言を例に、「行けれん」「行かれん」などの可能表現の語形が語用論的な観点で使い分けられている例を挙げている。また、渋谷(1992: 145)は、「行(い)けない」に限って、「きみはもう一人で生きてはいけなはずだ」などの例文の中で(補助動詞的な使用に限り)、不可能と禁止との解釈のゆれを指摘している。前者は、不可能を表す意味の範囲内での語形の多様化を示している例であり、後者は同一語形における不可能と禁止の解釈の多義性を指摘したものである。当該方言における否定形「書けん」と「書かれん」については、同じく可能形「*書かれる」から派生し、語形を異にしつつ意味も分化させている点では、極めて特異な派生、意味分化をなしていると考えられる。しかも、「書かれん」という派生形は「*書かれる」という当該方言での非許容形から派生している点も、十分に特異なことであると指摘できる。また、五段動詞の「書かれん」と「書けん」、一段動詞・カ変動詞の「見られん」と「見れん」の意味分化と派生は、本稿で考察した「ar 抜き」という観点で捉えるならば、両者を同じ体系として扱うことができる。五段動詞の例として「行かれん」と「行けん」、一段動詞・カ変動詞の例として「見られん」と「見れん」の派生と意味の分化について、それぞれ(7)、(8)に示す。

(7) 「書かれん」と「書けん」の派生と意味の分化の過程

	可能形 (肯定)		否定形
書く	→ *書かれる *kakareru (非許容形)	→	書かれん (禁止)
	↳ 書ける kakeru (ar 抜き)	→	書けん (不可能)

(8) 「見られん」と「見れん」の派生と意味の分化の過程

	可能形 (肯定)		否定形
見る	→ *見られる *mirareru (非許容形)	→	見られん (禁止)
	↳ 見れる mireru (ar 抜き)	→	見れん (不可能)

これらの例において、「書かれん」(7)、「見られん」(8)の、禁止としての解釈に対し

ては、「書く」「見る」ことが状況的に考えて不可能なのでしてはならないことになる」と捉えて、解釈の一つとして状況可能を想定することは可能である⁹。しかし、当該方言で、*ar* 抜き派生の「書けん」「見れん」が、能力可能、状況可能の両者の解釈が可能であって、可能形の単一の表現形式となっていることや、「行かれん」「見られん」が、当該方言では本来的には許容されないこれらの肯定形からの派生であることなどから、特異な意味素性の分化が起こったと考えるのが妥当である。

5. レ足す動詞を含む可能表現の多様性

5.1. 倉吉方言のレ足す動詞の分布

倉吉方言においては、五段動詞の可能動詞「書ける」「読める」などに対し、「書かれる」「読めれる」といった、余剰的な挿入をともなった語形が存在する。文字表記上 <レ> が付加されるため、「レ足すことば」と呼ばれ (真田 2002: 126 など)、現代標準語ではラ抜き同様、誤用表現とされている (浅川 2021)。真田 (2002: 124f.) は、西日本各地に認められる、二重可能形式としている。鳥取県方言、とりわけ、倉吉市方言のものに対して、室山 (1982: 195f., 1998: 24) は、「行かれる」と「行ける」のコンタミネーションと説明する。なお、室山 (1982, 1998) の記述に反し、現在では鳥取県倉吉地域において「行かれる」という語形が使われることはほとんどないので、少なくとも倉吉方言に関しては、既存の 2 つの形が融合したのではなく、「書かれる」の場合は、「書かれる」→「書ける」→「書かれる」の順序に派生したものと推定できる。そして、第 2 節で考察したとおり、「*書かれる」→「書ける」の可能動詞の派生は、音韻的には *kakareru* からの *ar* の脱落であるので、「書ける」→「書かれる」の音韻添加については、*ar* が脱落した同じ箇所に対し、*er* を代償的に埋め合わせていると考えるのが妥当である。これには、「れる」後続形の「*書かれる」に直接 <レ> が挿入された「*書かれれる」のような語形が存在しないという事実も証拠となる。

(9) 「*書かれる」→「書ける」→「書かれる」の音韻派生

「*書かれる」	<i>ar</i> 削除	「書ける」	<i>er</i> 挿入	「書かれる」
* <i>kakareru</i>	>	<i>kak<ar>eru</i>	>	<i>kak__eru</i>
				>
				<i>kak_ereru</i>
				>
				<i>kakereru</i>

第 2 節および第 3 節で述べたように、五段動詞の可能形「書ける」「読める」タイプと、一段動詞およびカ変動詞のラ抜き動詞「見れる」「食べれる」「来れる」タイプは、音韻的には同じ体系で派生する。仮に、ラ抜き動詞について、(9) と同じ過程でレ足すを施すと、「見れれる」という語形が導き出せるが (10)、倉吉方言においては、ラ抜き

⁹ 福光優一郎氏の指摘による。

動詞にレ足すが施された語形は生じない(11)。

(10) ラ抜き+レ足す動詞 (倉吉方言では非許容)

「*見られる」 ar 削除 「見れる」 er 挿入 「*見れれる」
 *mirareru > mir<ar>eru > mir__eru > mirereru > *mirereru

(11) *見れれる、*食べれれる、*来れれる、...

(9)と(10)における非対称性は、ラ抜き動詞はすべて「-れる」で終わり、これにレ足すが施されると、「れれ」(re.re)という同一音の音節が繰り返されるため、それを回避する作用が働くためとも考えられる。たとえば、(9)の過程は、「走る」「渡る」「取る」など、可能動詞が「走れる」「渡れる」「取れる」のように「-れる」で終わる場合はレ足す動詞は形成されない。

(12) *走れれる、*渡れれる、*取れれる、...

ただし、一段動詞「入れる」「忘れる」「隠れる」などに対するラ抜き形は(13)のとおり、「れれ」(re.re)連続が存在するにもかかわらず許容される。

(13) 入れれる、忘れれる、隠れれる、... (倉吉方言で許容形)

(13)のような re.re 連続は、「-れる」で終わる一段動詞のラ抜き形で網羅的であるので、(11)および(12)に示した許容されない語形は、当該方言で re.re 連続が回避されるという音韻的特徴を示すものとはいえない。もし、当該方言に re.re 連続が回避されるという強い傾向があるのだとすれば、(13)は例外的な数例に留まるはずだからである。あるいは、「入れられる」「忘れられる」「隠れられる」というラ抜きのない本来的な「-られる」後続可能形の復活や「*入れらる」「*忘れらる」「*隠れらる」のような別形への交替などが想定されて、それらによって re.re 連続の回避がなされているという説明が可能となるが、当該方言にそのような事例は存在しない。また、当該方言の語彙全般で、レ足す動詞の環境以外で re.re 連続、またはその他の同一音、同一音節の連続が積極的に回避されるということも観察されない。

5.2. レ足す動詞をめぐる可能表現の意味機能の検討

倉吉方言では、レ足す動詞が許容される場合は、可能表現に「書ける」「書けれる」のような二様の語形が併存することになる。ただし、これらの語形に対しては、能力可能

と状況可能を区別することはない。次の(14)のように、倉吉方言では能力可能、状況可能のいずれに対しても「読める」「読めれる」が許容される¹⁰。

(14)

- a. この程度の文章なら、小学生でも[読める／読めれる]。(能力可能)
- b. 今日は図書館は開いているので、本が借りて[読める／読めれる]。(状況可能)

これは、否定の場合にも同様に成り立つ。

(15)

- a. この哲学の専門書は、私には[読めん／読めれん]。(能力可能)
- b. もう暗いので、あそこの看板の字が[読めん／読めれん]。(状況可能)

可能表現にレ足す動詞をもつ方言として、たとえば高知県土佐方言は、「書ける」「書けれる」に加えて「書けれれる」という、さらに <レ> が足された語形をもつ。つまり、当該方言では、レ足す動詞に関連して、「-る」「-れる」「-れれる」という3段階の形が存在することになるが、別形の「よー書く」、またそれらの否定形も含めて、相互間に能力可能と状況可能の区別はしない(吉田 1982: 441f.)。

いくつかの可能表現形に対して、用法を区別する方言が報告されている。たとえば、渋谷(2006: 63f.)は、愛媛県宇和島方言で、「-れる」と「-れれる」の用法の区別があり、(16a)と(16b)の対立は、一見、潜在可能と実現可能の区別のように見えるが、むしろ、1 モーラ長い「-れれる／-れれん」(16b)の方が、動作主が努力するといった現実世界での出来事を言葉に写し取るかたちでアイコンニックに表現していることのほうが重要であるとされている。

(16) 愛媛県宇和島方言 (渋谷 2006: 63)

- a. (窓がさび付いているのを知っていて、その窓を開けようとしている人に)
その窓は開けれん (潜在可能)
- b. (窓を開けようとしても開かなくて、再度強く押しながら)
んー、この窓、開けれれん (実現可能)

その論拠として、動作主の努力が関与しない場合は実現可能の場合でも「-れれる」形は

¹⁰ (14)、(15)、(19)、(20)の例文の許容については、倉吉市在住のインフォーマント6人(内訳: 12歳男性、15歳女性、51歳女性、53歳男性、57歳男性、81歳女性)に対し聞き取り調査を行った(2021年7月実施)。

許容されず(17)、実現可能の文に対して「-れる」も「-れるる」もどちらも許容されることがあることがあげられている(18)。

(17) 愛媛県宇和島方言 (渋谷 2006: 63f.)

おとといは平日だったからその部屋が[*開けれれた／開けれた]けど、今日は日曜日だから[*開けれれん／開けれん]。

(18)¹¹ 愛媛県宇和島方言 (渋谷 2006: 64)

- a. (開かないと思っていた窓を軽く動かしてみて)
あつ、この窓、開けれた
- b. (何度も窓を開けることを試みて最後に力を込めて開けて)
やった！ この窓、やっと開けれれた

鳥取県倉吉方言では、筆者の内省(筆者は鳥取県倉吉方言話者)とこれまでの調査では、可能表現の可能動詞「書ける／書けん」などと「書けるる／書けれん」などの間に、愛媛県宇和島方言のような、語形によって「努力」が関与するようなニュアンスの違いを明確に表現し分けることは確認できていない。

(19) 可能表現の動作主の努力の関与の有無 (肯定)

- a. 一生懸命練習したら、いい文章が[書ける／書けるる]ようになった。(努力の関与あり)
- b. あの部屋を使えば、レポートの続きが[書ける／書けるる]。(努力の関与なし)

(20) 可能表現の動作主の努力の関与の有無 (否定)

- a. スピーチの原稿がどうしてもうまく[書けん／書けれん]。(努力の関与あり)
- b. あんなガタガタの机ではとても字が[書けん／書けれん]。(努力の関与なし)

6. サ変動詞の可能形をめぐる問題

現代標準語においては、サ変動詞「する」に対する「れる」後続形は「される」であるが、尊敬や受動などの意味で用いられるのが普通で、可能の意味で用いられることはない。現代標準語では、「できる」という別の形を用いることになっている(井上 1998: 19)。

一方、倉吉方言では、やはり可能形として「される」が用いられることはないものの、

¹¹ この2つの例文でも、(18b)の「-れるる」の方が、(18a)の「-れる」に対して動作主の努力が関与しているのは明白である。

否定形の「されん」は禁止を表す。

(21) そんなことは、されん。(してはいけない)

第4節で示した、「書く」「見る」の、生起しない可能形「*書かれる」「*見られる」から禁止表現「書かれん」「見られん」が派生する過程を「する」に関してその過程のモデルをあてはめると以下のようになり、他の活用形と同様、可能表現からの禁止の派生（可能からの意味の分化）を統一的に捉えることができる。

(22) 禁止表現「されん」の派生と意味の分化の過程

	可能形 (肯定)		否定形
する	→ *される *sareru (非許容形)	→	されん (禁止)
	↳ ラ抜き (ar 抜き) 形なし		
	↳ できる (補充(suppletion))	→	できん (不可能)

倉吉方言には、「する」の禁止表現として、「されん」の他に「すられん」という形がある。「すられん」の解釈については、サ変動詞「する」が五段化した推定の未然形「*すら-」に「-れん」が後続したという説明をすることは可能である。渋谷(1992: 190)によると、山陰地方にはあまねく五段化がみられるとあり、鳥取県伯耆西部方言(室山 1982: 195)、島根県出雲北部方言(広戸 1982: 27)、岡山県岡山市方言(虫明 1982: 92f.)などに関して、一部の一段動詞が五段化している例が報告されている。桑本(2018: 26f.)では、倉吉方言の「着リャ(ラ)ーセン」(着ない、着ることはない)について、一段動詞の連用形として *kiri- という存在しない形を想定しなければ派生が説明できないとしており、これはすなわち当該方言の五段化の傾向を示唆する他の現象として挙げることができる。当該方言で、サ変動詞に関しても同様の五段化の徴候が見られ、「すられん」の存在はその一端であると推定することは可能である。

なお、「されん」と「すられん」には条件や語用論上の使い分けのようなものは、筆者の当該方言の調査では、今のところ観察されていない。

7. おわりに

以上、鳥取県倉吉方言の可能表現について、ラ抜き動詞とレ足す動詞を中心に、方言内部での音韻派生と意味機能に基づく体系化を行い、また発展的に派生した「-れん」後続の禁止表現について分析した。

一段動詞、カ変動詞の可能形「見られる」「食べられる」「来られる」から派生した「見れる」「食べれる」「来れる」は、標準語では未だ誤用とされている一方、倉吉方言では、多

くの他の地域と同様、正用されており、優勢ですらある。このいわゆるラ抜き動詞の派生は、標準語でもほぼ廃れた、五段動詞の「-れる」後続可能形からの可能動詞の派生（例：書かれる > 書ける）と比較すると、音韻的には同じく ar が削除されているという共通点が見られる。また、可能動詞もラ抜き動詞も、もとになった語形（*書かれる、*見られる、など）はいずれも当該方言では許容されないという点も一致している。なお、それらの許容されない語形に対して、否定形「書かれん」「見られん」などは禁止を表す表現として発展し、可能表現とは切り離された意味機能を担っている。

レ不足動詞に関しては、五段動詞に限って存在し、「書かれる」>「書ける」の可能動詞派生での ar 削除を受けて、同位置への補充として er 挿入を想定して「書ける」が派生しているとするのが妥当である。また、当該方言では、複数の可能表現が可能な場合に（「書ける」「書ける」など）相互間に意味や語用論的な用法の差異は認められない。

また、サ変動詞に対して、「-れる」後続の可能表現はないものの（標準語と同様「できる」が補充される）、*「される」（可能としては非許容）からの否定形「されん」という禁止表現があり、これは、五段動詞「*書かれる」からの「書かれん」、一段動詞、カ変動詞「*見られる」からの「見られん」という禁止表現とは、意味論的、形態音韻論的派生と並行的に扱うことができる。また、別形「すられん」は、サ変動詞の五段化の徴候が見られる例である。

可能表現に対しては、能力可能と状況可能の区別や、それとともに渋谷(1993: 14)が考察の中心に置いている、「実現系可能」と「潜在系可能」という区別などを、語形や用法との関連、許容度の程度などからさらに考察を深める必要がある。本稿での考察のかぎりでは、これらの語形による区別ははっきりとは示すことができなかつた。この点は、今後の課題としておく。

参考文献

- 有本光彦(2019)「ラ抜きことば」木部(2019), 153.
浅川哲也(2021)「ら抜き言葉」が進行した「れ不足言葉」が、明らかに「誤用」だと断言できる理由」現代ビジネス. 2021.07.09. <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/84627> [2021年7月アクセス].
服部範子(2002)「第16章 言語の変化」大津由紀雄・池内正幸・今西典子・水光雅則編『言語学研究入門 生成文法を学ぶ人のために』224-235. 東京：研究社.
広戸惇(1982)「1 中国方言の概説」飯豊他(1982), 1-30.
飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編(1982)『中国・四国地方の方言』講座方言学 8. 東京：国書刊行会.
井上史雄(1998)『日本語ウォッチング』東京：岩波書店.

- 木部暢子編(2019)『明解方言学事典』東京：三省堂.
- 桑本裕二(2018)「鳥取県倉吉方言におけるア段長音の派生と分布について」『東北大学言語学論集』27: 19-29.
- 虫明吉次郎(1982)「3 岡山県の方言」飯豊他(1982), 59-101.
- 室山敏昭(1982)「6 鳥取県の方言」飯豊他(1982), 175-209.
- 室山敏昭(1998)「I 総論」平山輝男(編者代表)『鳥取県のことば』日本のことばシリーズ31. 1-34. 東京：明治書院.
- 真田信治(2002)『方言の日本地図 ことばの旅』東京：講談社.
- 渋谷勝己(1993)「日本語可能動詞の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1): 1-262.
- 渋谷勝己(2006)「第2章 自発・可能」小林隆(編)『方言の文法』シリーズ方言学2. 47-92. 東京：岩波書店.
- 渋谷勝己(2019)「可能表現」木部(2019), 36-37.
- 吉田則夫(1982)「14 高知県の方言」飯豊他(1982), 425-449.

**A morphophonological analysis of *ar* deleted and *er* inserted verb forms
in Kurayoshi Japanese**

Yuji Kuwamoto

【Abstract】 In this paper, I systematize potential verbs and their derivations in Kurayoshi Japanese including *ra-nuki* (ex. *mireru* < *mirareru* ‘to be able to see’) and *re-tasu* verbs (ex. *kakereru* < *kakeru* ‘to be able to write’), which are much less pervasive in standard Japanese, but much more common in this dialect. On a morphophonological basis, *ra-nuki* verbs are formed by *ar* deletion (ex. *mir*<*ar*>*eru*) and *re-tasu* by *er* insertion (ex. *kak-er-eru*). In addition, a notable characteristic of this dialect is that prohibition verbs (*miraren* ‘mustn’t see’, *kakaren* ‘mustn’t write’, etc.) are derived from potential verbs. There are also other prohibition verbs like *saren*, or *suraren* ‘mustn’t do’ (for both), which do not exist in standard Japanese. The system of potential verbs and their derivations in this dialect would be rather particular as a whole.